

蘇軾の婉約詞について：北宋の詞風との関連から

正木，佐枝子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9677>

出版情報：中国文学論集. 23, pp. 59-76, 1994-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

蘇軾の婉約詞について

——北宋の詞風との関連から——

正木 佐枝子

はじめに

唐代に始まる詞の趣きは、北宋の蘇軾に至るまではどのようなものであったか。それを代表的な詞人及び詞集で確かめるなら、例えば、晩唐の温庭筠、その温詞を巻頭に掲げる五代蜀の詞集『花間集』、北宋では晏殊・晏幾道、歐陽修、柳永などがそうであるように、概ね婉約的であったといえる。一例として、歐陽修の蝶恋花（庭院深深深幾許……）を思い起こしてみよう。閉ざされた奥深い庭の内、佳人が来ぬあの人を想い、過ぎゆく春を留めるところができないと詠われる。ところで、この蝶恋花の作者は馮延巳であるともいわれている。宋词に互見詞が多いことは、唐圭璋が考証しただけでも延べ五百首を軽く越えるほどであるが、問題なのは、詞風だけでは誰の作とも俄かには判断できないほど婉約の詞風が似通っていることである。ここでいう婉約詞とは、花、柳などの美しい風景に、鞦韆、管絃などの小物をあしらひ、そして男女の情や惜春の愁いなどの情を連綿と綴ったものである。北宋では、詞といえば多くがこのようなものであった。

ところが、蘇軾（字子瞻、東坡居士、一〇三六—一〇一年）に至って、従来の詞風の他に新たな趣きの詞が作られるようになった。蘇軾は、張先に始まるとされる、詞に小題をつける手法を大いに活用し、次韻詞を作り、従来ならば詩に詠まれた題材、例えば農村の日常や、茶を飲むさまや、さらには人生の感慨等を詞に詠み込んだ。従来蘇軾が「詩を以て詞を作る」といわれたり、豪放詞の開祖といわれるのは専らこのためである。豪放詞の代表

蘇軾の婉約詞について（正木）

としてしばしば引用される蘇軾の有名な念奴嬌（大江東去……）¹が、歐陽修の蝶恋花などとは全く趣きを異にするのはいうまでもない。

このように、文学史上では、蘇軾が従来のものとは趣きの違う詞を作ったことが強調される。従来の研究では、この点に着目して論じることがほとんどであった。後述するように、蘇軾は念奴嬌のような詞を作り、「自ら是れ一家」なることに得意然としている節がある。蘇軾が詞にながしかの変化をもたらしたのは確かであるから、これは当然注目すべきことである。

ところが、この文学史的常識に対して、近人・呉世昌は疑問を提起した。呉説を要約しよう。すなわち「蘇軾詞のうち豪放詞と呼べるものはわずか七、八首しかない。北宋に多少の豪放詞は存在したけれども、もともと詞の流派はなかった、つまり全部が『花間集』に代表される詞風だったとするのが妥当であって、蘇軾を領袖とする豪放派は存在しなかった。」²この説は中国で十年近い論争を惹起したが、そのほとんどは呉説に反論するものであり、それらを集約すると、すなわち「呉の豪放詞の定義は厳しすぎるし、たとえ数首であっても後世に影響を与えた点で蘇軾の豪放詞は注目すべきである」ということになる。このように呉説は賛同者がほとんどいないけれども、提起そのものは価値あるものと見なされているようである。筆者もまた呉説に啓発された者の一人である。

そこで以下に、先ず小稿という婉約・豪放の定義について確認し、次に小稿の目的について述べておく。先ず婉約詞の定義については、冒頭で説明したように、様々な小物をあしらいながら情を連綿と述べたものである。豪放詞の定義は人によって若干変わる。筆者は、後掲する蘇軾の書簡や宋代の隨筆から、蘇軾が他の詞人と詞風が違うことを強く意識していたと思われる詞、すなわち念奴嬌や江城子・密州出獵などのような力強い詞風をもったものを豪放詞と定義する。また、詩のような題材で人生の感慨を詠んだもの、しかし同時に表現が切々として情に訴えるものは、「詩を以て詞を作る」詞として、婉約・豪放のいずれの要素も兼ね備えると考ええる。この定義を用いて今蘇軾詞三百余首を分類すると、婉約詞、「詩を以て詞を作る」詞が各々約半数、豪放詞が数首となる。

筆者の分類はもとより目安でしかないが、それでも婉約詞が無視できない多数であることが判明する。これまでは、蘇軾の婉約詞はその数の多さにも係らず、取り上げられることはほとんどなく、仮に取り上げられたにしても、

蘇軾が如何に従来の詞に変革を加えたかと言う点が論じられるばかりであった。しかし、編年となっている蘇軾詞を端から順に読めば、従来の詞から変化しつつある詞を作ると同時に、蘇軾が従来と全く同じ傾向の詞を作っていることに気がつく。小稿では、蘇軾がなぜこのように多くの婉約詞を、詞作していた時期全般に亘って作ったのか、その原因について探ってみようと思う。それは同時に、北宋詞の本質を詞風面から確認し、北宋の詞風が蘇軾に与えた影響を明らかにすることになると思う。

一

蘇軾は一体どのような詞観を持ち、宋人は果たして蘇軾詞をどのように評価していたのであろうか。先ず前者について、従来指摘されてきた蘇軾の書簡等を振り返っておこう。

①近ごろ却って頗る小詞を作る。柳七郎（永）の風味無しと雖も、亦自らはれ一家なり。呵呵。數日前、郊外に獵し、獲る所頗る多し。作りて一闕を得たり。東州の壯士をして掌を抵ち足を頓とんならして之を歌ひ、笛を吹き鼓を撃ちて以て節を爲さしめば、頗る壯觀なり。寫呈して笑を取らむ。

（「與鮮于子駿三首以下俱密州其二」卷五三）

②又新詞を恵まる。句句警拔。詩人の雄あり。小詞にあらざるなり。

（「與陳季常十六首以下俱黃州其十三」卷五三）

③新詞を頒示せらる。此れ古人の長短句の詩なり。之を得て驚き喜ぶ。試みに之に繼がむと勉む。晚おそくなれば即ち面呈せむ。

（「與蔡景繁十四首以下俱黃州其四」卷五五）

④微詞は宛轉として、蓋し詩の裔なり。

（「祭張子野文」卷六三）

⑤張子野（先）の詩筆は老妙なり。歌詞は乃ち其餘技なるのみ。

（「題張子野詩集後」卷六八）

①の書簡は密州で書かれたものであり、作った詞は江城子・密州出獵であることが指摘されている。男女の情を詠んで「凡そ井水の飲む處有れば、即ち能く柳詞を歌ふ」（葉夢得『避暑錄話』卷下）といわれるほど流行した柳永

蘇軾の婉約詞について（正木）

詞に比べて、蘇軾は自分には格別な風格があるといっている。この詞を東州（密州）の偉丈夫に歌わせ、笛や鼓で節をとらせたのが壯觀であつたという。この江城子も豪放詞の範疇に属するといえるが、蘇軾はそれを作ることに自負の念を抱いているのである。官職にはあまり恵まれず詩よりも詞で有名な柳永とは違って、蘇軾は宋代を代表する文人官僚であり、従つて士大夫の必須教養である詩に重きを置いた。②⑤の書簡等から窺われるように、詞は詩の末裔であり、「小」詞であり、余技に作るものにすぎない。その詞に詩の趣きがあつてこそ意に適うものとなるのである。蘇軾は、三十七才の杭州通判であつた時からやつと詞作を始めたことが知られているが、その三六年後の密州滞任時期に早くも自己の詞風についての見識を持つていたことは注目に値する。

次に宋人の蘇軾詞に関する評語について見てみよう。

*子瞻は詩を以て詞を爲る、教坊の雷大使の舞ひの如く、天下の工を極むと雖も、要は本色に非ず。

（陳師道『後山詩話』）

*世語つて云ふ……蘇子瞻の詞は詩の如しと。

（陳師道『後山詩話』）

*李易安（清照）云ふ……晏元獻（殊）、歐陽永叔（脩）、蘇子瞻（軾）に至りては、學は天人に際り、小歌詞を作爲するは、直に蠡の水を大海より酌むが如し、然れども皆句讀不葺の詩なるのみ。

（胡仔『苕溪漁隱叢話後集』卷三三）

*東坡玉堂に在りしとき、幕士の善く謳ふあり。因りて問ふ。我が詞は柳詞に比べて何如と。對へて曰く、柳郎中（永）の詞は、只だ好く十七八の女孩兒の紅牙を執りて板を拍ちて「楊柳の外に曉の風、殘んの月」を唱ふのみ。學士の詞は須く關西の大漢の鐵板を執りて「大江東に去る」を唱ふべしと。公これが爲に絶倒す。

（俞文豹『吹劍續錄』）

以上の評語から、蘇軾の詞は詩のようだとしきりにいわれるのが分かる。前述の念奴嬌を例えるのに、關西の大男が鉄板を執つて唱うのにふさわしいという。これらは蘇軾自身の詞觀と軌を一にする表現であり、蘇軾詞の、他の詞とは趣きの違ふ点をよく評し得たものといえる。

では、宋人は蘇軾のこのような詞しか知らなかつたのであろうか。否である。宋代の隨筆に於いて言及された蘇

軾詞を調査してみると以下の表のような結果となり、明らかに婉約と思われる詞（☆印）が約三分の一を占めることが分かる。（なお、念奴嬌のみ豪放詞、残りは一詩を以て詞を作る」詞と思われる。）

念奴嬌	（大江東去……）	12条	☆西江月（玉骨那愁瘴霧……）	11条
水調歌頭	（明月幾時有……）	10条	卜算子（缺月挂疏桐……）	8条
水調歌頭	（落日繡簾捲……）	8条	☆賀新郎（乳燕棲華屋……）	7条
☆洞仙歌	（冰肌玉骨……）	6条	☆水龍吟（似花還似非花……）	5条
滿江紅	（東武南城……）	4条	永遇樂（明月如霜……）	4条
浣溪沙	（西塞人邊白鷺飛……）	4条	水龍吟（楚山修竹如雲……）	3条
西江月	（世事一場大夢……）	3条	☆定風波（常羨人間琢玉郎……）	3条
虞美人	（波聲拍枕長淮曉……）	3条	戚氏（玉龜山……）	3条
☆浣溪沙	（輕汗微微透碧……）	3条		

ここではその一例として、念奴嬌に次いで世上に知られた西江月について見てみる。

西江月

玉骨那愁瘴霧。	玉骨	那ぞ瘴霧を愁ふ
冰姿自有仙風。	冰姿	自ら仙風有り
海仙時遣探芳叢。	海仙をして時に芳叢を	探さしむれば
倒挂緑毛么鳳。	倒挂	緑毛 么鳳あり
素面常嫌粉澆。	素面は常に粉澆を嫌ふ	
洗妝不褪脣紅。	妝を洗ふも脣の紅を褪せず	
高情已逐曉雲空。	高情は已に逐ふ曉雲の空	
不與梨花同夢。	梨花と同には夢みず	

蘇軾の婉約詞について（正木）

この詞は梅を詠んだものである。そして同時に美人を思わせるのは、詞の常套手段といえる。么鳳は南方の珍禽で名を倒掛子といい、緑毛である。詞の内容を以下に説明する。「故郷蜀によく見られる海仙花（錦帯花）のような自分が梅の咲く芳叢を探すと、么鳳がいる。その芳叢の中で、この梅は南方の湿熱の気を嫌い、自ら気品ある姿をしている。その姿は、美人が化粧を嫌うように、素顔が美しいため化粧を落しても唇の紅は褪せないようだ。この梅の高らかな心持ちは朝焼けの空を逐うように、白い雲のような梨花とは違う」というものである。この詞ではその気品あるさまが美しく描かれる。このような蘇軾詞も、念奴嬌が知られる一方で、人口に膾炙していたのである。この詞に自注はないが、『冷齋夜話』に妾朝雲が死去し、それを弔うために詩とこの詞を作ったと書かれている。¹⁰⁾この詞から豪放詞を作るのに得意然としているだけではない蘇軾の別の一面が俚げれる。

要するに、蘇軾は詞に詩の趣きがあるものを好み、宋人もそれをよく言い表した。しかしその一方で、蘇軾は西江月のような婉約の佳詞を確かに製作していた。宋人はこのような蘇軾詞の全体像を知りながら、他の詞人とは明らかに異なり、特筆すべきこととして、蘇軾の豪放詞及び「詩を以て詞を作る」詞についての評語を多く書いていたのにすぎないのである。

二

では、独自の好みを持ち、自らの詞風に自負心を持つ蘇軾が、一体なぜ、他の詞人と大差のない詞を作っていたのであろうか。そこで蘇軾詞の小題に注目してみよう。蘇軾詞の約三分の一には小題があり、各詞がどのような場面で作られたか等を知ることができる。ここで気づくのは、蘇軾がしばしば人に求められて詞を作っていることである。先ず、求められてすぐさま作ったと思われる詞の小題を数例挙げる。

蝶戀花 微しく雪ふる、客に善く笛を吹き鼓を撃つ者有り、方に酔はむとする中、有る人の苦寒を送る詩に和するを求む、遂に此を以て之に答ふ。¹¹⁾

江城子 陳直方が妾嵒、錢塘の人なり。新詞を求むれば、爲に此を作る。……¹²⁾

さらには代作という形を採ることもある。

菩薩蠻 西湖の席上にて諸妓に代わりて陳述古を送る。¹⁵

この菩薩蠻から窺われるように、即興の詞は、席上すなわち宴席と関係が深いと思われる。

浣溪沙 席上にて楚守田待問の小鬟に贈る。¹⁵

西江月 杭州の交代にて林子中の席上にて作る。¹⁵

最後に挙げた西江月は、地方官の引き継ぎの宴席という、いわば公的な席上の作であるためと思われるが、「詩を以て詞を作る」詞とはいえ、豪放的要素が強い。しかしこれは却って稀なものであって、以上挙げたものは婉約詞又は婉約的要素の強い「詩を以て詞を作る」詞といえる。そして作詞の場を明示していないものも、その他の詞の状況及び詞風の類似から宴席で作られた可能性が高いと思われる。

そもそも文人の間で詞を鑑賞する場合は、宴席で唱われ楽しみとされるのが常であった。その証左は、蘇軾の詩集を繙けば枚挙に暇がない。¹⁵蘇軾の頃から書簡に添えて詞を贈答し、音楽とは切り離して鑑賞するようになったことが指摘されているが（後述）、詞が宴席から全く姿を消したわけではない。以上に見てきたように、宴席には妓女が侍り、席上の人や妓女に求められて詞を作り、それを歌妓に唱わせたであろう。その性格から、詞は婉約的なものが好まれたと思われる。そして、蘇軾はそのような宴席の性格を心得ていて、求められればその場に合った婉約詞を当然のこととして作っていたのである。¹⁵

三

では、これらのような即興、すなわちその場を楽しむ小道具としての詞ではなく、書簡で贈答するなどの、詞作の技量を追求し、詞の鑑賞そのものを最終目的とする場合には、蘇軾はどのように詞作したのであろうか。

蘇軾には章窳（字質夫）の水龍吟に次韻した詞がある。この有名な詞を次に掲げる。¹⁵

水龍吟 次韻章質夫楊花詞 蘇軾

蘇軾の婉約詞について（正木）

似花還似非花。

也無人惜從教墜。

拋家傍路。

思量卻是。

無情有思。

榮損柔腸。

困酣嬌眼。

欲開還閉。

夢隨風萬里。

尋郎去處。

又還被。

鶯呼起。

花に似て還た花に非ざるが似く

また人の惜しむなく墜ちしむるに従す

家を抛てて路に傍ひ

思量するに卻て是れ

情なきものに思ひあり

柔腸を榮損し

困み酣てし嬌眼は

開かむと欲して還た閉じたり

夢は風に隨ひて萬里のかなた

郎の去りし處を尋ぬるに

又た還たも

鶯の被めに呼び起こされぬ

不恨此花飛盡。

恨西園落紅難綴。

曉來雨過。

遺蹤何在。

一池萍碎。

春色三分。

二分塵土。

一分流水。

細看來。

此の花の飛び盡くすを恨まず

西園の落紅の綴り難きを恨む

曉來 雨過ぐ

遺蹤は何こに在りや

一池の萍の碎けしあるのみ

春色は三分せば

二分は塵土

一分は流水

細かに看來たれば

不是楊花。

是れ楊花ならず

點點是。

點點として是れ

離人淚。

離人の涙なり

この次韻詞は、朱注（清・朱孝藏編「東坡樂府三卷」）では元祐二（一〇八七）年の作とするが、村上哲見氏は蘇軾の書簡等から元豐四、五、六（一〇八一、二、三）年のいずれかの年のものと考えておられる。これを踏まえて、その書簡を筆者なりに読み直してみると、そこから蘇軾の章棗の詞に対する気持ちをを知ることができるように思う。その書簡とは次のものである。

某啓す。愼靜以て憂患に處せと諭せらるるを承く。心より我を愛するの深きに非ざれば、何を以て此に及ばむ。

謹しみてこれを座右に置かむ。柳花の詞は絶妙なり。來者をして何を以て詞を描かしむるや。本より敢て繼作せざらむも、又公の正に柳花の飛ぶ時に巡按に出でしを思ひ、坐るに四子の閉門して愁斷せしを想ふ。故にその意を寫し、次韻一首を寄せ去る。亦告げむ。以て人に示さざれ。七夕詞も亦錄呈す。……

（「與章質夫三首以下俱黃州其一」卷五五）

蘇軾は、詞に詩の趣きがあるもの、豪放な詞を好む人であった。この書簡は黃州での作であるが、黃州滞在時期は、従来、蘇軾独特の詞風が見られるようになると評される。そのような蘇軾が章棗の詞に対して傍線部のように言ったのは、謙辞ではなく、本当に和韻するのがためらわれたためではないかと思う。いざ出来上がってみれば、宋の朱弁（『曲洧旧聞』卷五）や南宋の張炎（『詞源』卷下）のいうように、原詞よりも優れていると評価されるほどであるが、その朱弁は同じ箇所では

東坡これに和す。豪放にて律呂に入らざるがごとくなれども、徐ろにこれを視れば、聲韻諧婉なり。便ち質夫の詞を學びて織繡なる工夫あり。

と、蘇軾が原詞に學んで工夫をこらしたであろうことをいっている。また宋の魏慶之はその著『魏慶之詞話』の中で、両者を比べて章棗詞を貶める人の意見を肯定しながらも、

余以爲く、質夫詞中の所謂「傍珠簾散漫、垂垂欲下、依前被、風扶起。」も亦楊花の妙處を曲盡すると謂ふべ

蘇軾の婉約詞について（正木）

し。東坡の和する所は高なると雖も、恐るらくは未だ及ぶ能はず。

と云つて、章榘詞も捨てたものではないという。つまり蘇軾詞は人々の口の端に上りやすいものであった。蘇軾はそれを熟知しており、作るからには原詞を上回るものをもと思つたであろう。その分、自分の好みではないものを求められたとすると、蘇軾としては些か製作に躊躇したのではないかと思われる。

それはまた、次に掲げる、章榘から琵琶用の詞を求められ、数年後にやっと作り上げた逸話からも窺われる。

章質夫 琵琶の歌詞を求む。敢て寄せずんばあらず。……（「與朱康叔二十首以下俱黃州其二十一」卷五九）

そして出来上がったのは次の詞と思われる。

水調歌頭 歐陽文忠公嘗て余に問へり。琴詩は何者をか最も善しとすると。答ふるに退之の「穎師の琴を聴く詩」を以てす。公曰く、此の詩は固より奇麗なり。然れども琴を聴くに非ず、乃ち琵琶を聴く詩なりと。余深くこれを然りとす。建安の章質夫の家の琵琶を善くする者歌詞を爲すを乞へり。

余久しく作らず。特に退之の詞を取りて、稍や樂括を加へ、聲律に就かして以てこれに遣りて云ふ。

昵昵兒女語。 昵昵として兒女語る

燈火夜微明。 燈火 夜に微かに明かなり

恩怨爾汝來去。 恩怨 爾汝 來り去り

彈指淚和聲。 指を弾きて涙もて聲に和す

忽變軒昂勇士。 忽ち軒昂なる勇士に變ず

一鼓填然作氣。 一鼓すれば填然として氣を作す

千里不留行。 千里も行くを留めず

回首暮雲遠。 回首すれば暮雲遠く

飛絮攪青冥。 飛絮 青冥に攪る

衆禽裏。

衆禽の裏

眞彩鳳。

眞の彩鳳のみ

獨不鳴。

獨り鳴かず

躋攀寸步千險。躋攀して千險に寸歩し

一落百尋輕。一たび落れば百尋輕し

煩子指間風雨。煩しきこと子の指間の風雨は

置我腸中冰炭。我が腸中に冰炭を置く

起坐不能平。起坐するに平らかなること能はず

推手從歸去。手を推して從ひて歸り去る

無淚與君傾。涙無く君に傾くることあらむや

さて、この詞の制作年代について、朱注は、蘇軾と章棻が同時に汴京にいたことを以て、元祐二（一〇八七）年にこの詞を配列している。これに対して村上哲見氏は、小題に「余久しく作らず」（右傍線部）とあるから「琵琶を聴いた時に作ったものではない」とし、さらに「この頃では手紙に添えて詞を贈答することがごく普通に行われていたのであるから、詞の贈答があったからといって、その二人が同じ土地にいたと考えねばならぬ理由は全くない」として、前掲の「與朱康叔（黃州滯在中、元豐三〇六、一〇八〇〜一〇八三年）」から、まもなく寄せた可能性をあげ、朱氏の配列に疑問をもたれている。

しかし筆者は、「余久しく作らず」ということに着目すれば、さらに別の解釈が成り立つように思う。蘇軾が黃州にいた年とその年に作った詞は、元豐三年三首、四年九首、五年二三首、六年十一首である。元豐七年十二首、八年十一首を経て、元祐元年（在汴京）には詞を作ったという記録はない。もとより小題から認められないだけであって、全く作らなかつたとは言いがたいが、この後は元祐二年二首、三年一首、四年二首の詞が認められることを思えば、この一年はほとんど詞作をしなかつた可能性はある。そして朱氏のように元祐二年にこの詞を配すれば、作詞の空白と「余久しく作らず」とが符合するのである。

蘇軾の婉約詞について（正木）

そこで筆者は次のように考えたい。蘇軾は黄州滞在中に章窳から詞を求められ、作らないわけにはいかないと言いつつも、その返事が延び延びになっていた。ところが数年後に二人が汴京で顔を合わせた時に、蘇軾はそれを思いついたか、再度求められるかしてやっとなつた。しかしあまりに返事が遅くなつた弁解として、わざわざ「余久しく作らず」といったのである。しかも出来上がった詞は、歐陽修を引き合いに出して韓愈の詩を詞に作り直したものであり、その内容は、「琵琶の音色が、児女の声や、勇士や鳳凰や、高みから落ちる石のように変化して、人の心をあまりに動かすので思わず手で曲を遮つた」というものである。この詞は、婉約詞ではなく蘇軾の好む「詩を以て詞を作る」詞といえる。それは全く窮余の策としてできたといえまいか。

筆者はここに、蘇軾が章窳から水龍吟の次韻詞を求められた時に「柳花の詞は絶妙なり。來者をして何を以て詞を描かしむるや。本より敢えて繼作せざらむも……」といったのが決して謙辞ではないことを思うのである。

この推測を助けるものとして、劉貢父の回文菩薩蛮に倣つた詞を取り上げたい。先ず劉貢父に宛てた書簡の中で、蘇軾は次のようにいっている。

某啓す。示及せられし回文小関は、律度精緻、雍容たるを失はず、和せむと欲すれども殆んど及ぶべからず、已に歌ふ者に授けたり。王（景純）寺丞は信に得る所あり、亦頗る至術を傳下す。詩の之に贈る有れば、寫呈し、一笑と爲さむ。
 （「與劉貢父七首以下俱汝州（熙寧十、一〇七七年）其三」卷五十一）

そして、筆禍事件である、御史台の獄に入牢するという辛酸を経て、汝州滞在時期より三年後の黄州滞在中に次の書簡がある。

劉十五の體に效ひ、回文菩薩蠻四首を作り寄せ去り、一笑と爲さむ。知らず公曾て劉十五の詞を見しや否や。劉此の様を造りて寄せらるるも、今之を失へり。渠の消息を得しや否や。莘老（孫覺）は必ず時に書を得ば、徐ろに樂しむに在らむか。
 （「與李公擇十七首以下俱黄州其十三」卷五十一）

ここに言及する「回文菩薩蛮四首」とは、次のものと思われる。四首連作であるが、紙幅の関係上其の一のみを掲げる。

翠鬢斜幔雲垂耳。

翠鬢 斜幔 耳に雲垂す

耳垂雲幔斜鬢翠。

耳に垂る雲のごとき幔は斜めにして鬢は翠

春晚睡昏昏。

春晚れ睡ること昏昏たり

昏昏睡晚春。

昏昏として晩春に睡る

細花梨雪墜。

細き花梨は雪のごとく墜る

墜雪梨花細。

墜ること雪のごとき梨の花は細し

顰淺念誰人。

顰淺く誰が人を念ふ

人誰念淺顰。

人誰れか淺き顰を念ふ

これらを要するに、蘇軾はまず原詞に「和せんと欲すれども殆んど及ぶべからず」、詞の代わりに詩を贈っている。そして筆禍事件を経て、（ここでは省略した書簡の前半で）自分の近況を報告しながら、友人達の消息を知りたいと思ひ、以前贈られた詞を思い出してこの詞を作ったと思われる。ここでは詞作が鑑賞目的ではなく、友人を偲ぶよすがとなっている。恐らく御史台の獄に入牢するという辛酸がなければ、この詞は作られなかったのではないか。それは、蘇軾が書簡を受け取った時に、贈られた詞と求められる詞が婉約詞であったため、返書に億劫さを感じていたためではないかと筆者は考へる。

水龍吟にしても菩薩蛮にしても、蘇軾は婉約である原詞にすぐには和さずに、躊躇して時間を置いてから作った。水調歌頭に至っては、弁解をしながら蘇軾本来の「詩を以て詞を作る」詞を作ることによって返事としたのである。蘇軾にとって婉約詞は作れないものではなかった。宴席で求められれば気軽に応じたであろう。しかし、次韻詞や琵琶用の詞など、婉約詞でしかも高度な技術を必要とする詞を作るのはためらわれた。贈られた詞が「此古人の長短句の詩なり。之を得て驚き喜ぶ。試みに之を継がむと勉」めたような積極性はない。これらの婉約詞は、蘇軾は必ずしも望まなかったが、当時の詞壇は当然のこととして求めていたのである。

では、第一章で取り上げた妾朝雲のために作った西江月のような、小題に誰に求められたか等を明記しない婉約

蘇軾の婉約詞について（正木）

詞については、どのように考えるべきか。西江月は詠む相手が妾（梅）であるために、蘇軾は婉約詞がふさわしいと判断したのであろう。そう判断する前提には、それが最もふさわしいという詞壇の傾向があったと思われる。例えば、

東坡先生の長短句は既に鏤板さる、復た張賓老の編する所を得、并びに蜀本に載する者悉くこれを收む。江山秀麗の句、樽俎戲劇の詞は、搜羅して幾んど盡せり。これを無窮に傳ふれば、豪放風流の及ぶべからざるを想像するなり。紹興辛未（一一五一年）孟冬、至游居士曾慥題す。

（明・吳訥輯『百家詞』本「東坡詞二卷拾遺一卷」）「東坡詞拾遺跋語」この跋語のように、「江山秀麗の句、樽俎戲劇の詞」を蘇軾の豪放詞よりも重視する傾向があったことが分かる。宋人の随筆で多く言及されるように、蘇軾の詩詞文は注目的であり、その書は高値がついたという。これらのことより筆者は以下のように推察する。蘇軾は己れの作品が人々に鑑賞されることを強く意識していた。そこで、詞壇の傾向を加味した詞作もしていた。だからこそ、現在蘇軾の編年になった詞を順に読む時、蘇軾の好む「詩を以て詞を作る」詞や豪放詞に混じって、一貫して婉約詞が存在するのである。

おわりに

小稿の考察により、『花間集』以来の詞風の伝統が時代の共通認識としてあり、蘇軾はそれを無視できずに、自らが好んだ豪放詞や「詩を以て詞を作る」詞の他に、婉約詞をも、その場に応じ、求めに応じ、詞壇の傾向を加味しながら一貫して作っていた情況が明らかになったと思う。蘇軾独特の詞風が見られるようになる黄州時期をすぎると、却って蘇軾の習作時期の、他の詞人と大差の無い詞風にもどってしまったといわれるが、これも蘇軾が當時の一般的な詞風から乖離することに困難を感じたためであると推測できまいか。また、明・毛晋や清・朱孝臧、さらに近人・曹樹銘が、蘇軾を豪放詞人として一部の婉約詞を誤入としているのには、再考が必要と感ずる。

豪放という観点から考えるなら、「自らはれ一家なり」という割合に、豪放詞は数首しかない。又、蘇軾の存命

中から北宋末までには、若干の豪放詞は存在するが、特に爆発的ブームを起こしたわけでもないし、豪放派が独自に形成されたわけでもない。つまり蘇軾とほぼ同時期の周邦彦のような詞人が高く評価されたのは、婉約詞が好まれるという詞壇の傾向を反映したものであって至極当然なことであったといえよう。

南宋になると、辛棄疾や劉過、劉克莊などの所謂豪放詞人も出てくるが、その豪放詞の内容は中原を回復したいという時代の政治的背景のもとに成り立つものである。南宋詞に関して筆者の今後の課題としたいが、ともあれ、時代が比較的良く、文化活動にいそむことのできた北宋では、詞本来の姿は婉約であった。従来とは趣きの違う詞風を持ち込み、後世に影響を与えた蘇軾の力量はやはり注目に値するが、その蘇軾にも、当時の主流であった婉約の詞風が大きく影響していたのである。

注

* テキストは、蘇軾詞は龍榆生編『東坡樂府箋』（商務印書館、一九三六年初版一九五八年）、その他の詞は唐圭璋編『全宋詞』（中華書局、一九六五年）、蘇軾の書簡は孔凡礼点校『蘇軾文集』（中華書局、一九八六年）に拠った。

- (1) 蝶戀花 庭院深深深幾許。楊柳堆煙、簾幕無重數。玉勒雕鞍遊冶處。樓高不見章臺路。 雨橫風狂三
月暮。門掩黃昏、無計留春住。淚眼問花花不語。亂紅飛過鞦韆去。
- (2) 唐圭璋『宋詞四考』（江蘇古籍出版社、一九八五年）「宋詞互見考」
- (3) 張先が詞に小題をつけ始め、それが蘇軾に影響し、蘇軾が多用したことについては、村上哲見『宋詞研究』
（創文社、昭和五十一年初版）「張子野詞論」―蘇東坡詞論―を参照。
- (4) 念奴嬌 赤壁懷古 大江東去。浪淘盡。千古風流人物。故壘西邊。人道是。三國周郎赤壁。亂石崩雲。
驚濤裂岸。捲起千堆雪。江山如畫。一時多少豪傑。遙想公瑾當年。小喬初嫁了。雄姿英發。羽扇綸巾。
談笑間。強虜灰飛煙滅。故國神遊。多情應笑我。早生華髮。人間如夢。一尊還酹江月。
- (5) 「有関蘇詞的若干問題」(『文学遺産』、一九八三年、二期)

蘇軾の婉約詞について(正木)

「宋词中的“豪放派”和“婉约派”」（『文史知識』、一九八三年、九期）

この二篇の論文に対して直接間接に言及した論文は枚挙に暇がない。例として次の幾つかを挙げておく。

鄧喬彬「首届詞学討論会召開」（『文学遺產』、一九八四年、一期）

王水照「蘇軾豪放詞派的涵義和評價問題」（『中華文史論叢』、一九八四年、五期）

朱靖華「蘇軾的豪放詞及其在詞史上的地位」（『徐州師範學院學報・哲学社会科学』、一九八五年、一期）

顧全芳「蘇東坡不是豪放詞人」（『山西師大學報』、一九九〇年、三期）

劉石「蘇軾詞研究」（大陸地區博士論文叢刊、天津出版社、民國八十一年）四二—四五頁

- (6) そもそも婉約・豪放という語を使い、詞をこの二派に分けたのは明人張綬と言われる。（「按詞體大略有二。一體婉約、一體豪放、婉約者欲其辭情醞藉、豪放者欲其氣象恢弘。」張綬『詩餘圖譜』凡例）宋代に於てはこの語を使った分類はなされていないけれども、蘇軾の後は詞に大別して二つの詞風が存在したことは、適当な語を使うか否かに係らず、誰もが認めることであろう。今日一般に詞をこの定義で二派に分け、又、小稿でもこの語を借りるのである。

- (7) 吳雪濤「蘇軾『与鮮于子駿』系年考辨」（『河北學刊』、一九八三年、四期）

江城子 密州出獵 老夫聊發少年狂。左牽黃。右擎蒼。錦帽貂裘千騎卷平岡。爲報傾城隨太守。親射虎看孫郎。 酒酣胸膽尚開張。鬢微霜。又何妨。持節雲中何日遣馮唐。會挽雕弓如滿月。西北望。射天狼。

- (8) 調査した随筆は以下の通り。『詞話叢編』所収の宋代の詞話十種、『歷代詩話』所収の宋代の詩話十五種、

『歷代詩話統編』所収の宋代の詩話十二種、『宋詩話輯佚』、『彙輯宋人詞話』、『詩話總龜』、『清夜錄』、『侯鯖錄』、『冷齋夜話』、『貴耳集』、『鶴林玉露』、『野客叢書』

- (9) 宋・傅幹注、劉尚榮校証『傅幹注坡詞』（巴蜀書社、一九九三年）六二頁に、題に「古梅」とある。なお、『東坡樂府箋』ではこれを紹聖三年惠州での作とする。

- (10) （紹聖）三年七月十五日朝雲卒。……又作梅花詞曰。玉骨那愁瘴霧者。其寓意爲朝雲作也。（釋惠洪『冷齋夜話』卷一）

- (11) 簾外東風交雨霰。簾裏佳人。笑語如鶯燕。深惜今年正月暖。鏡光酒色搖金盞。 搗鼓漁陽過未徧。舞榭瓊釵。汗溼香羅襖。今夜何人吟古怨。清詩未了冰生硯。
- (12) 玉人家在鳳凰山。水雲間。掩門閒。門外行人。立馬看弓彎。十里春風誰指似。斜日映。繡簾斑。多情好事與君還。閱新鰥。拭餘濟。明月空江。香霧著雲鬢。陌上花開春盡也。聞舊曲。破朱顏。
- (13) 娟娟缺月西南落。相思撥斷琵琶索。枕淚夢魂中。覺來眉暈重。 華堂堆燭淚。長笛吹新水。醉客各西東。應思陳孟公。
- (14) 學畫鴉兒正妙年。陽城下蔡困嫣然。憑君莫唱短因緣。 霧帳吹笙香嫋嫋。霜庭按舞月娟娟。曲終紅袖落雙纏。
- (15) 昨夜扁舟京口。今朝馬首長安。舊官何物對新官。只有湖山公案。 此景百年幾變。箇中下語千難。使君才氣卷波瀾。與把新詩判斷。
- なお、『東坡樂府箋』では小題に「蘇州交代……」となっているが、引く所の朱孝臧の「蘇州疑杭州之誤……」により改めた。
- (16) 例えば、卷十四「登常山絕頂廣麗亭」に「紅裙欲仙去、長笛有餘哀。清歌入雲霄、妙舞纖腰回。」とある。
- (17) 宴席の詞と妓女との関係は、横山伊勢雄「東坡詞論考——作詞の場と作品の分析——」（『国文学漢文学論叢』十八輯、昭和四八年）に指摘がある。
- (18) 章案の原詞は以下の通り。水龍吟 燕忙鶯懶花殘、正堤上、柳花飄墜。輕飛點畫青林、誰道全無才思。間趁遊絲、靜臨深院、日長門閉。傍珠簾散漫、垂垂欲下、依前被、風扶起。 蘭帳玉人睡覺、怪春衣、雪霏瓊綴。繡牀旋滿、香毬無數、才圓卻碎。時見蜂兒、仰粘輕粉、魚吹池水。望章臺路杳、金鞍遊蕩、有盈盈淚。
- (19) 前出『宋詞研究』第四章附考四東坡詞札記その一
- (20) 蘇軾の詩文及び手蹟を敬愛し、珍重する人々がいたことは、村上哲見「蘇東坡書簡の伝来と東坡集諸本の系譜について」（『中国文学報』二七冊、一九七七年四月）に指摘がある。

蘇軾の婉約詞について（正木）

- (21) 以上の統計はテキストとした『東坡樂府箋』に拠る。また、曹樹銘校編『蘇東坡詞上下』（台湾商務印書館、民国七二年初版）に拠れば、元豊三年六首、四年十五首、五年二十六首、六年二十首、七年十五首、八年十一首、元祐元年〇首、二年四首、三年二首、四年二首である。但し元祐二年の數に該詞は含まない（本文も同じ）。
- (22) この書簡は元豊三（一〇八〇）年の冬に書かれ、詞はその頃か、そのすこし前に作られたことが、村上哲見氏によって考証されている。注(19)参照。
- (23) 四時閨怨回文、效劉十五貢父體。（注(9)『傳幹注坡詞』二〇四頁）
- (24) ここで、蘇軾の詞作に対する音律の影響について少しく触れておきたい。当時、曲に乗せて唱われていた詞は、音律に合うことが必須条件であった。蘇軾も詞作に際して音律に留意していたであろうことは、本文前掲の「與劉貢父」の書簡や朱弁の隨筆などからも推察できる。しかし、音律こそが蘇軾の婉約詞の製作を躊躇させた原因とは考え難い。なぜなら蘇軾は水調歌頭のように詩を音律に合わせて詞に作り直したり、豪放でない所は音律に合せることができたからである。（「諸賢（蘇軾と辛棄疾を指す）之詞。固豪放矣。不豪放處、未嘗不叶律也。」南宋・沈義父『樂府指迷』）詞の音律と内容は不可分であるが、筆者は、蘇軾が詞作する場合はより内容を重視し、そのため婉約詞の製作に困難を感じたのではないかと考える。
- (25) 多渾入歐、黃、秦、柳作今悉刪去。（毛晉『宋名家詞』跋）
- (26) 元刻中有五首即爲毛氏所已刪、顧尚疑其未盡。如意難忘之花擁鴛房、雨中花慢之遼院重簾、嫩臉羞蛾二首、不類坡詞、苦無顯證。（朱孝臧編『疆村叢書』所收「東坡樂府三卷」凡例）
- (27) 按此詞係女流口吻、意境與東坡詞絕不相類、斷非東坡所作。（注(21)『蘇東坡詞』四六三頁等）